

生活科から社会科への接続と発展に関する研究 —小学校3年生の社会科の実践を手がかりとして—

西野 雄一郎* 中野 真志**

*近江八幡市立 八幡小学校

**愛知教育大学 生活科教育講座

A Study about Connection and Development from Living Environment Studies to Social Studies

Yuichiro Nishino* and Shinji NAKANO**

*Hachiman Elementary School, Ohomihachiman, Siga 523-0876 Japan

**Department of Living Environment Studies, Aichi University of Education, Kariya, Aichi 448-8542, Japan

I はじめに

ベネッセ教育総合研究所による1990年から2015年までの25年間の「学習基本調査」で見えてきた「好きな教科・活動ランキング(小学生)」において、社会科は常に最下位となっている¹。その原因の1つは、社会科で学習する内容が子どもたちの日常生活の現実から乖離したところにあると推察される²。社会科の授業は多くの場合、教科書を主な教材とした教師主導の授業で、ひたすら板書をノートに写し、試験問題を解くために教科書とノートの記述の暗記を迫られるものだという認識は、確かに人々の意識の中にあるだろう。

生活科が創設された平成元年の学習指導要領では、社会科においても生活科のように、体験活動(身近な地域の観察や調査など)を重要視した学習活動への転換が図られた³。そして、平成29年告示の新学習指導要領においても、「地域の実態を生かし、児童が興味・関心を持って取り組めるようにするとともに、観察や見学、聞き取りなどの調査活動を含む具体的な体験を伴う学習やそれに伴う表現活動の一層の充実を図ること。」⁴といったように、子どもたちが興味・関心をもって主体的に学習するために、体験活動を取り入れることを配慮事項として挙げている。

しかしながら、上述のような授業が教育現場で未だに数多く行われている現実が見受けられる。その現状を打破すべく、これまでも生活科と社会科との関連を深める研究が行われてきた。

例えば、末政(1993)は、具体的な体験を通じた学びを重視する生活科と社会科との関連を深めるために、「社会科の授業においても、頭も心も体も働かせて学

ぶ動学を基本視座とする学習活動を求めている」と述べて、体験を重視した社会科の授業実践の在り方について提案した⁵。

また、小形(2008)は、小学校3年生社会科の地域学習における子どもの「わがこと(独自性)」を生かした地図作りの実践を分析し、生活科から社会科への継ぎ目のない指導について考察した⁶。

最近では加納(2016)が、生活科で育んだ社会的な見方・考え方の素地を社会科で育成すべき社会的な見方・考え方へとボトムアップ的につなげる生活科実践の価値や教科指導法について考察している⁷。

これらの研究成果から、社会科における学習活動が子どもにとって意味があり、社会にとって意義があるためには、まずは社会科が生活科と同様に適宜、体験活動の中で学ばれるものであること、次に子どもたちが自分事として主体的に学習できる余地が残されること、そして、社会科で育成する必要がある社会的な見方・考え方及び資質・能力が、学問及び教科の論理からトップダウン的に教え込まれるものではなく、子どもの生活と意識の流れを重視した生活科の学習活動からボトムアップ的に学ばれるものであることが望ましいといえる。

本稿では、先述の研究成果を踏まえながら、西野が行った生活科とのつながりを意識した小学校3年生の社会科の実践を新学習指導要領で育成を目指す資質・能力を観点として分析し、生活科と社会科の接続と発展、生活科の在り方について考察する。社会科において育成すべき資質・能力を育むために、生活科においてどのような学習活動を行っていくことが大切になるのかを考察することにより、社会科における質の高い

学びが実現されると考える。まずは、筆者の行った主体的な学び方を生かし体験活動を重視した社会科実践の概要を述べ、その後、その実践を上述の観点で分析・考察する。

II 授業の実際

1 単元名「わたしたちの町のようす」

2 単元で育てたい資質・能力

《知識・技能》

- ・八幡小学区の地理的環境について、人々の生活との関連を踏まえて理解する。
- ・町探検での具体的体験を通じた調査活動により必要な情報を調べまとめる技能を身につけるようにする。

《思考力、判断力、表現力等》

- ・地域ごとの土地利用の特色やその意味を考える力とそれを表現する力を養う。

《学びに向かう力、人間性等》

- ・町探検で生じた疑問を解決しようとする態度を養う。
- ・町探検で様々な対象に出会ったり、町の良さを見つめたりする中で、地域に対する愛着を養う。

3 単元計画(全 26 時間完了)

	学習内容
第 1 時	「わたしたちの町のようす」導入
第 2 時	町探検の計画を立てよう
第 3-4 時	東コース(駅方面)の町探検に行こう
第 5 時	東コースで見つけたものを教え合おう 振り返りの日記を書こう
第 6 時	地図記号について知ろう
第 7-8 時	東コースの探検マップに地図記号を描き 込み、色も塗ろう
第 9-10 時	北コース(昔からの農家集落方面)の町探 検に行こう
第 11 時	北コースで見つけたものを教え合おう 振り返りの日記を書こう
第 12-13 時	北コースの探検マップに地図記号を描き 込み、色も塗ろう
第 14 時	東コースと北コースの違いについて話し 合おう
第 15-16 時	西コース(商店街方面)の町探検に行こう
第 17 時	西コースで見つけたものを教え合おう 振り返りの日記を書こう
第 18-19 時	西コースの探検マップに地図記号を描き 込み、色も塗ろう
第 20-21 時	南コース(田んぼ、畑、ひまわり館方面) の町探検に行こう
第 22 時	南コースで見つけたものを教え合おう 振り返りの日記を書こう
第 23-24 時	南コースの探検マップに地図記号を描き

	込み、色も塗ろう
第 25-26 時	全てのコースの地図を貼り合わせ、町探検 を振り返ろう

4 授業の実際

(1)初めての社会科「わたしたちの町のようす」導入 (第 1 時)

八幡小学校 3 年生は 4 クラス合計 132 名の児童が在籍し、本学級の児童数は実践当時、33 名である。「先生、3 年生でも町探検するの？」2 年生の頃に子どもたちが作成した、通称キラリマップを家から持ってくるよう伝えたとき、子どもたちがうれしそうに聞いてきた。生活科での町探検が好きだったようである。

子どもたちは、2 年生の頃の町探検で「とびたくんをさがせ！」と名付けられた活動を行った。とびたくんとは、元々は隣接する東近江市において交通安全のために作られた人形であり、子どもが交通事故に遭遇しそうな場所に置かれる人形だった。近江八幡市には、そのとびたくんが、様々な



(写真 1) 右：とびたくん
左：丁稚奉公のとびたくん

恰好をして立っている(写真 1)。例えば、地域の名産品となっている丁稚ようかんを製造・販売している和た与さんの前には、丁稚奉公の恰好をしたとびたくんがおり、近江牛の販売をしているカネ吉さんの前には、牛の恰好をしたとびたくんが立っている。つまるところ、とびたくんが町おこしのために用いられているのである。2 年生の頃の子どもたちは、町にある様々な恰好をしたとびたくんを探す中で、和た与さんやカネ吉さんなどのお店と出会い、関わりを持っていった。その活動のまとめとして子どもたちが作成したのが、生活科のキラリマップだった。

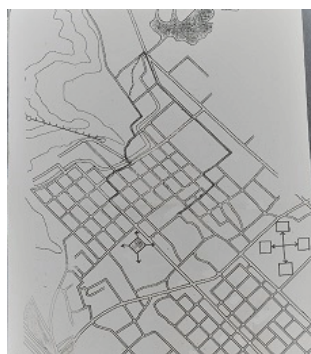
キラリマップを持って来るよう呼びかけた次の週、15 人の子どもがそれを持ってきた。2 年生のときに子どもたちが作成したキラリマップは、教師が描いた簡単な地図に、子どもたちが町で見つけたキラリと輝くような素敵なものを書き加えていったものだった(写真 2)。子どもたちが持ってきたキラリマップを拡大器に映して皆で見ながら、生活科で発見した人、もの、ことを思い出す時間とした。「どんなことが楽しかった？」と尋ねると、「いろんなとびたくんを見つけた!」、「いろんなお店のキラリを見つけたことです。」



(写真2)生活科のキラリマップ

などと返ってきた。

「みんな、いっぱい町探検をしてきたんですね。3年生でも、町探検をするよ。けれども、もっと広い範囲を探検するんです。ほら、こんなに広い！」と言いながら、八幡小学区の白地図(写真3)を黒板に掲示した。「わー!」、「広い!」など、驚きを表す声が聞こえた。そんな子どもたちに向かって、これから社会科で学習していくことについて話した。「みんなは、生活科では、町探検に行ってふしぎやキラリをたくさん見つけてきたね。社会科ではさらに、八幡小学区中のふしぎやキラリを見つけるよ。」と説明した。子どもたちにとっては、初めて学習する教科であることも手伝って、その活動を楽しみにしている様子が伺えた。



(写真3)学区の白地図

(2) 町探検の計画を立てよう(第2時)

町探検は、4回に分けて実施することになった。順番としては、近江八幡駅がある東コース、古い建物や農家が軒を連ねる北コース、古くからの商店街を包括する西コース、田んぼや畑が面積の大半を占める南コースの順番で巡ることになった。

駅方面の東コースを最初のコースに選んだのは、多種多様な建物が並んでいるコースなので、これから学習することになる地図記号の必要性をより実感しやすいと考えたからである。地図記号を早い段階で習得することによって、後の探検においても自発的に使えるようになってほしいと願い、東コースを最初の探検コースとして選択した。

子どもたちは、2年生の頃にキラリマップに絵や文をたくさん描き込んでいた。そのようにすることができたのは、子どもたちの活動範囲が狭かったり、2年

生当時の担任教師が意図的に地図を簡略化し、絵や文を書き込みやすくしていたりしたからだった。

しかし、現実で使用されている地図は、より広域を細かく描いているため、絵や文を書き込む余地が少ない場合が多い。子どもたちは、地図作りの中で、文はもとより、絵地図でさえ描き込みにくいという問題に直面することになるだろう。そこで登場するのが地図記号である。地図記号を用いることによって、見やすく誰でも分かりやすい地図になることを実感できるようになるだろう。そのように構想して、まずは東コースを探検する計画を立てることにした。

初めに、東コースだけを切り取って拡大した白地図を黒板に掲示し、子どもたちにもその地図を配布した。「それでも広い!」と驚く子どもたちだった。「早く行きたいね。駅の方にはどんな建物があると思う?」と尋ねると、「アルプラ(スーパーマーケット)!」、「王将!」、「ぼくん家!」など、多くの声が返ってきた。

「2年生のときみたいに、どんどん絵や文を描き込んでもいいよ。探検の途中でパッと描き込めるように、今の内にお店や家などのマークを考えておこう。」と声かけし、教師が絵地図の手本を見せると、各々家のマークや店のマークを考えて地図の裏に描き始めた。神社のマークを◎とするなど、建物の頭文字を丸で囲んだマークを作る子どもも多かった。「先生、今日行かへんの?はよ行きたい!」と言い出す子どももあり、町探検を楽しみにしている姿を見ることができた。

(3) 東コース(駅方面)の町探検に行こう

(第3・4・5時)

子どもたちはクラスごとに2列に並び、探検ボードに東コースの白地図を挟んで、意気揚々と町探検に出かけた。

駅方面にはお店が多く、子どもたちは信号待ちの時間などを利用して、地図に絵、記号、マークなどを描き込んでいった。「あかん、描き切れなくなった!」と言う子ども(A児)がいたので、「すごくいっぱいお店があるね。全部描き込まなくても、『これは描き込みたい!』って思えるものだけを描き込めばいいよ。また教室に戻ったときに、皆で何があったか教え合えるからね。」と皆に伝えた。東コースは駅に近いので、マンションや飲食店、市役所を含む官庁街などがあつた。

教室に戻り、地図で探検経路を振り返りながら、子どもたちが見つけてきたものを共有する時間とした。町探検から帰ってきたばかりの子どもたちは、疲れた様子を見せながらも、自分の見つけてきたものを早く皆に言いたくて仕方がない様子だった。

子どもたちには、まず、「何があつたか。」と、「どのような絵地図を描いたか。」を尋ねた。例えば、「〇〇薬局がありました。」と言う子どもがいれば、「どんな絵で描き込んだ?」と尋ねた。すると、黒板に掲示した拡大地図に絵や記号やマークなどを描き込みに来る子どもがたくさんいた。見つけてきた建物を挙げさせ

る中で、自転車屋さんを㊸と描き込んだ子どもと、神社を㊸と描き込んだ子どもがいたことがわかった。

続いて、「じゃあ、これは多かったなと思うものはありましたか。」と尋ねた。子どもたちが場所による土地利用の違いについて比較しやすくなるためである。「自分の家の周りと比べてどうかって考えられてもすばらしいですね。」と付け加えると、たくさんの子どもの手が挙がった。㊸「私の家の近所と比べて、お店がたくさんありました。」というA児の意見から始まり、「家が多かったです。」「ぼくん家とかと比べて、マンションとかあるし、高い建物があった。」「お店がめっちゃ多かった。」「信号も多かった。」「車が多かった。」「自動販売機が多かった。」などの意見が出てきた。

以下に、町探検(東コース)の感想を記載する。

いろいろあるいてわかったことは、町にはいろんなお店や工場がいっぱいあることです。でも、ふしぎに思ったことは、なんでこんなにお店や工場がいっぱいあるんだとふしぎに思いました。町にはいろいろなふしぎがあって、それをときたいと思いました。
A児

町たんけんでは、いろんな店や家があると知りました。わたしは、「何で、こんなにいっぱい店があるんだろう。もっと知りたいな。」と思いました。知らない場所がたくさんあっておどろきました。
B児

町探検の最中には、描ききれない程にお店を見つけたA児は、自分の住んでいる町(古い町屋が並ぶ西コース)と比べてお店が多いことにも驚いていた。B児は古くからの農家が軒を連ねる北コースの子どもであり、自分の住んでいる地域との違いに驚いていた。他の子どもも、町探検で知らないことを知れた嬉しさや、もっと町のことを知りたいという気持ちに溢れていた。

(4) 地図記号について知ろう(第6時)

次の週の社会科の時間に、東コース探検の振り返りに用いた拡大地図を再び掲示した。㊸「この㊸って何やったかな?」と子どもたちに尋ねると、「自転車屋さん!」と答える子どもと、「神社!」と答える子どもがいた。「あれ、どっかが忘れた。」「最初に通った方が自転車屋さんやん!」などと、クラスの子どものやりとりが至る所で起こってざわついたので、教科書に記載されている地図記号について紹介した。「このような戸惑いが起こらないために、便利なものがあるんですね。」と教師が言うと、「先生、東コースの地図に、地図記号を描いてもいいですか。」と聞いてくる子どもがいたので、「もちろんです。次の北コースの地図にも描いてもいいですし、使えるときはどんどん使ってくださいらいいですね。」と伝え、クラスの皆とも共有した。

(5) 北コース(昔からの農家集落方面)の町探検に行こう(第9・10・11時)

北コースには何があるのか、子どもたちは楽しみにしていた。また、クラスの子どもの多くが住んでいるコースなので、自分の家の近くを通るのではない

かとわくわくしている子どももいた。子どもたちが歩いている中で驚いていたのは道の狭さだった。駅方面と比べると、広い道がなく、軒を連ねる農家と農家の間に狭い道が作られているような印象を受けた。また、お店がほとんどない代わりに、神社や寺が数多くあり、寺と神社の数を数える子どもも出てきた。覚えてたの地図記号を用いて寺と神社を地図に描き込む子どももいた。農家集落を抜け出した八幡小学区最北の地には、水郷めぐりが観光名所になっている北之庄沢が広がっており、ヨシ原の並ぶ自然豊かな景観に、子どもたちは「きれい!」と言って喜んだ。

㊸教室に戻った後、子どもたちは、東コース(駅方面)との違いを言いたがった。「東コースと比べて、道がせまかった。」「東コースは、店が多かったけど、北コースには店が少なくて、代わりに神社と寺がいっぱいあって、自然の景色がよかった。」「東コースといっしょで家が多かった。」「東コースよりも、自然とか田んぼとかが多かった。」などの意見が出てきた。以下が、町探検北コースの振り返りである。

今日、町たんけんに行きました。2回目の町たんけんは、北コースに行きました。北コースは、道がとてもせまくて、車が入れないくらいせまかったです。でも、家はたくさんありました。東コースとくらべて、とてもしんごうが少なかったです。あと、お店も少なかったです。なんで東コースと北コースでは、いろいろちがうのかな?と思いました。
C児

(6) 東コースと北コースの違いについて話し合おう(第14時)

C児の感想文を掲載した学級通信を子どもたちに配って読み合いをした後、「なんで道が広かったりせまかったりするの?」という疑問の声が上がったので、「うん。なんで東コースより北コースの方が道がせまいのかな?」と投げかけてみた。すると、「北之庄の人たちが車が通ってうるさかったり、事故が増えたりするのがいややったから。」「お店が少ないから、車が通る必要がなかったから。」「駅から遠いから、人も少なくなって、車もそんなに通らないから。」などの意見が出た。

その後、㊸北コース付近に住むB児が、「けど、私の家にも車はあるし、車もちゃんとすれ違えるで。」と言い、「あ、ほんまや!」と納得する子どももいた。ヒントとして、「東コースと北コースって、どっちが古い家が多かった?」と尋ねると、「あ!」と叫んで立ち上がったB児が、「古い家があって広い道が作れへんからや!私の家もめっちゃ昔からあるってお母さん言うてやったもん!」と言った。他の子どももその意見には納得したようだった。B児の実感を伴った気づきが、他の子どもたちの学びにもつながった。

続いて他の子どもが、「じゃあ、東コース(駅方面)は、新しい場所なんかな。」とつぶやいた。それに乗じて、他の子どもが「広い道があって車がたくさん通るから、

店が多いんちゃう。」と言い出したので、「なぜ東コースには、人やお店が多かったのか。」というテーマで話し合うことにした。「家が多かったから。」という意見には、「家は北コースにも多かったよ。」と意見を返す子どもがいた。「けど、マンションがいっぱいあったから、北コースよりも人が住んでいると思います。」と意見を付け加える子どももいた。

「何かがあったから、人が増えたんじゃないかな？」と教師が問いかけると、④「駅があったから人通りが増えて、店がいっぱいできた!」、「車が多く通る広い道があるから、店もいっぱいできたんだと思います。」などの意見が出てきた。子どもたちの町探検という具体的な体験から出てきた疑問から、社会的事象の特色や相互の関連、意味を考えることができた。

(7) 西コース(商店街方面)の町探検に行こう

(第15・16・17時)

西コースは、豊臣秀次が築いた八幡城の城下町として栄え、近江商人発祥の地であり、今でも多くの商店街が点在している。しかし、観光名所として有名である八幡堀付近を除いては、近くにできたスーパーマーケットの影響や、後継者不足の問題もあり、閉店するお店も多い。それでも、紙平老舗さん(和菓子屋)やスマ利文具さん(文房具屋)、荒川牧場さん(牛乳屋)などは健在であり、景観としても下町情緒溢れるノスタルジックな地域である。

子どもたちが探検をする中で、看板だけは掲げられているが閉まっているお店が多かったり、商店街なのに、住宅ばかりだったりすることに気付いたようだった。それでも、古い町屋や歴史あるお店が残るこの辺りでは、子どもたちはもっと探してみたいふしぎをたくさん見つけることができたようだった。

以下、西コースを探検した日のA児の振り返りを記載する。

自分の家の近くを通ってうれしかったです。店もあつたけど、家も多かつたです。ふしぎに思ったことは、京かい道しょう店がいはい、古い店がいっぱいあつたことです。お店に入らせてもらいたいです。(中略)めっちゃたのしかったです。家の近くを通って、いっぱい知っているところがありました。知らなかつたところもちょっとあつたけれど、それも、たんけんしていっぱい知れました。せわりでは、遊んだことはあるけど、どんなものかを考えたことはなかつたので、せわりのやくわりについて知りたいです。つかれたけど、いっぱい知れてうれしかったです。 A児

A児は、自分の家の近くを探検できたことが嬉しかったようだ。A児は、祖父と一緒によく商店街で買い物をするらしく、名産品の赤こんにやくを製造・販売している店の惣菜がおいしいことなどを探検中に教えてくれた。⑤探検途中で、「あ、こんなところにこんなお店があつたんや。」などというつぶやきも聞こえてきて、新たなふしぎを見つけられたようだった。

A児の文中に「せわり(背割)」という言葉が出てきた。背割とは、八幡城の城下町ができる頃に作られた

深い溝であり、商店街辺りの至る所に点在しているものである(写真4)。実は、商店街の辺りは水位が低く、城下町ができる以前は池だったそうだ。大雨の度に冠水していたために、たくさんの溝を作り、水を逃がすようにした。背割には、昔の人の土地利用の工夫や努力が詰まっている。そして、その大切さを知り、現在まで大切に残してきた人々がいる。

その背割が、探検中の子どもたちの目に留まった。「先生、ここにいっぱいザリガニがいるんやで。」と教えてくれたA児の近くで、「知ってる!背割やろ?」と言った子どもがいた。その子どももまた、商店街近辺に住んでいる子どもだった。⑥「これ、八幡堀まで続いているらしいで。あそこの背割も、もっと向こうの背割も、全部八幡堀までつながってるんやって。」とその子どもが言うと、「えー!」と周りの子どもも驚いて、背割の数を数え始めた。

背割については、「せわり探検隊」を結成して総合的な学習の時間において探究することになった。商店街のことについても、子どもたちはたくさんのふしぎを見つけてきたので、総合的な学習の時間に解決していくことになった。

社会科では、地域の人々の土地利用や地域の様子の移り変わりについて学習することになっている。背割について



(写真4)町にたくさんあつた背割

学ぶことや、城下町から商店街への移り変わりについて学習することは、社会科で学習すべき内容につながる。子どもたちの体験からの好奇心が、そのような学習内容を学ぶ動機付けとなった。

(8) 南コース(田んぼ、畑、ひまわり館方面)の町探検に行こう!(第20・21・22時)

近江八幡市は農地の面積が多い地域ではあるが、その中において八幡小学区は、どちらかという住宅地の面積の割合が多い地区である。駅の近くには新しい住宅が広がっており(東コース)、旧城下町付近には古くからの住宅が軒を連ねている(北コースの一部と西コース)。一方、学区を巡る探検としては最後の町探検となる南コースは、古くからの農家もあるが、圧倒的に田園風景の占める割合が高いコースである。

学校を出て歩いていると、しばらくは見晴らしの良い田んぼ道が続き、子どもたちは田んぼと畑の地図記号を白地図に書き込んでいた。田んぼ道が車道に差し掛かった所に、近江八幡市総合福祉センター「ひまわり館」があつた。館内には市の障害福祉課や介護保険課などがあり、保育所やデイサービスセンターも包括

する施設である。⑦子どもたちは、館内に入らせてもらい、ふしぎやキラリを探し始めた。

「先生、すごいハテナを見つけたで！」と子どもが呼びに来た。車椅子ユーザーでも手が届く所に押しボタンのある自動販売機だった(写真5)。館内にいた職員さんが来て、その自販機についての説明してくれた。

他にも、子どもたちはたくさんのキラリを見つけたようだった。以下は、ひまわり館について書いた子どもたちの振り返りである。



(写真5)ひまわり館の自動販売機

しまむらのよこにある、ひまわり館に入りました。そして、不自由な人がべんりに使えるように、いろいろくふうされていました。それはじどうはんばいきで、いちばん上のボタンがおせない人のために下にもボタンがあつてびっくりしました。 D児

はっ見したことは、手すりが2つついていて、下は小さい人が持つところと、上はつえをついているおじいちゃん、おばあちゃんが持つところになっていて、くふうがすごいと思いました。 E児

探検から帰って来てからも、ひまわり館について「まだ調べ足りなかった!」、「また行きたい!」という子どもがたくさんいた。

今後、子どもたちは、ひまわり館などの公共施設が市役所によって運営されていることや、このような公共施設が市役所によって災害時における避難場所に指定されていることなどを学ぶことになる。この経験が、それらのことを学ぶための良い動機付けとなった。

(9) 全てのコースの地図を貼り合わせ、町探検を振り返ろう(第25・26時)

子どもたちは、各コースを探検した後に、それぞれのコースの白地図に、地図記号を描き加えたり、土地利用のされかたによって色分けをして塗ったりする活動をしていた。その各コースの地図を貼り合わせて、校区全体の探検マップに仕立てる時間を取って、学区を巡る町探検のまとめとした。

写真6は、各コースの探検マップを貼り合わせて1枚の地図にしたものである。⑧「先生、探検したコースの特徴と違って書いてもいい?」と聞く子どもがいたので奨励すると、大多数の子どもが空きスペースに各コースの特徴を書き込み始めた。具体的な体験や、

それを基にした振り返りの活動などを通して、子どもたちは学区の特徴についてすっかり理解しているようだった。

この探検マップは、まだまだ未完成のものである。これから社会科での工場

見学や、総合的な学習の時間の「八まんキラリたんけんたい!」で見つけたことなどを描き込んでいくことになる。町探検により身近なフィールドとなった経験を基盤として、子どもたちは引き続き体験を通した意味ある学びを展開していくことだろう。

(写真6)まとめの時間の探検マップ



III 授業の分析と考察

1 主体的な体験活動による知識・技能の習得

新学習指導要領において、『白地図などにまとめる』際に、教科用図書『地図』を参照し、方位や主な地図記号について扱うこととあるように、3年生で地図記号を習得することは、子どもたちの地理的な空間認識を広げていくために大切なことである。

しかし、地図記号が子どもにとって意味のあるものとならなければ、それらはただ覚えるべきものとして子どもたちの頭の中に一旦は入るものの、またすぐに忘れられるものになってしまうだろう。

本実践においては、体験活動を充実させることにより、必然的に地図記号を学ぶ機会を設けた。下線部④は、子どもたちが地図記号について初めて学習する場面だった。子どもたちは、町探検に行つて見つけた建物を地図上に絵地図で表したり、建物の頭文字を丸で囲って記号にしたものを地図に描いたりしていた。

その中で、自転車屋さんを◎とする子どもと、神社を◎とする子どもが出てきた。地図を見たときに、どこに神社があるのかを示すために◎と記入したにも関わらず、◎に他の建物を表す意味も含まれているのであれば、子どもの立場から考えてみると、紛らわしくて仕方がない。そのように、実体験の中で生じた困難を解決してくれるのが地図記号だった。子どもたちはこの経験を通して、地図記号の必要性を身をもって体験することができた。

また、生活科で培ってきた主体的に学んでいく子どもたちの態度が社会科の学習内容をも主体的に学び取ることにつながる場面も見られた。例えば、町探検のトイレ休憩のつもりで立ち寄った近江八幡市総合福祉センター「ひまわり館」においては、下線部④のように、子どもたちはその施設のふしぎやキラリを率先して探し始め、市民の誰もが安心して利用することができる施設の工夫を学び取っていった。下線部⑤のように、進んでキラリマップの内容を充実させようとする子どもが出てきたのも、生活科のキラリマップ作りが主体的に行われていたからこそだと考える。

2 自分との関わりを基盤とした学習が社会科における思考力・判断力・表現力を育成する

本実践では自分と関わりの深い人、もの、ことをきっかけとして思考、判断、表現する子どもたちの姿が見られた。特に顕著に見られたのは、東コースと北コースとの違いについての話し合いを含む場面だった。

1回目の町探検を行った後、子どもたちは「自分の家の周り」と東コースを比べる」という思考活動を行った。例えば下線部⑦のように、A児は「自分の家の近所と比べて、店が多かった。」と考えて発言した。すると2回目の町探検後の振り返りにおいて子どもたちは、「東コースと北コースを比べる」という思考活動を行うようになった。例えば下線部⑧のように、東コースと比べて道がせまかったり、神社や寺がいっぱいあったり、自然が多かったりすることを発言する子どもの姿が見られた。体験と思考の繰り返しの中で、子どもたちと関わりのあるフィールドが広がり、同時に思考が至る範囲も広まっていったようだった。その中で、「なぜ東コースと比べて北コースは道がせまいのか。」といった疑問を持つ子どもが現れ、話し合いの場となった。話し合いの序盤は、事故や騒音の懸念を理由に、「車に通ってほしくないから。」といった意見が出ていたが、北コース付近に住んでいるB児の「私の家にも車はあるし、車もちゃんとすれ違える」という発言で話し合いの方向が変わり、昔からの土地利用の工夫や、下線部⑨のような、現在の土地利用の工夫にまで思考を深めることができた。

このように、生活科で大切にしてきた身近な世界との関わりから、体験を通してその世界を広げていくことにより、あるフィールドと別のフィールドを比較したり、様々なフィールドに共通している普遍的な土地利用の仕方に気付いたりすることができるのである。

3 生活科「地域への愛着」から、社会科「地域社会に対する誇りと愛情」へのつながり

本単元において、地域への愛着を深める姿を見ることができた。1回目の探検の振り返りにおいて、「私の家の近所と比べて、お店がたくさんありました。」と発言したA児は、自分の家の近所を通る3回目の西コースの探検においては、下線部⑩のように、自分がまだ

まだ知らなかった近所の様子に心を躍らせた。さらに、自分が普段ザリガニ掴みなどをして親しんでいる背割についての新たな情報を下線部⑪のように友だちから教えてもらい、背割についてのさらなる追究をしている様子だった。自分と関わりのある対象(ここでは背割)について、町探検を通してもっと知りたいという願いを持つことができた。このような関わりを繰り返しが、身近となった地域への愛着を深めていくことになる。そして、背割が作られた歴史的背景や、背割の保全に従事している人の努力に触れることにより、地域社会に対する誇りと愛情が育っていくと考える。

しかし、地域への愛着に関しては、生活科段階における課題も見えてきた。子どもたちは2年生のときに、確かに主体的に町探検をし、楽しんでキラリマップを作成してきた。だが、1学年4クラスという比較的大規模校であり、学年単位で実践をしている本校において、満足に繰り返し町探検に出ることができたかという、そうではなかったようだ。和た与さんやカネ吉さんにインタビューに行く活動もしてきたが、それぞれのお店や施設に1回ずつ訪問するまでに留まった。

それ故、3年生でも町探検をすることを子どもたちに伝えたとときに、子どもたちは町で色々なものに出会うのは楽しみにしていたが、「〇〇さんに会いたい。」や「〇〇屋にもう1回行きたい。」などの言葉は出てこなかった。教師が、「生活科の町探検で何がいちばん楽しかった？」と聞いたときにも、「いろんなふしぎやキラリを見つけるのが楽しかった！」とは言うものの、「ここのお店がよかったよ、おすすめだよっていう場所はある？」と聞いても、具体的にお店の人の良さを語る子どもの姿はなかった。

加納は、「繰り返し探検に行くことで、その人と精神的な距離もしだいに縮まっていくだろう。その距離が身近なるにつれて、大きく膨らんでくるのが愛着ではないか。」と述べている。

生活科で身近になり、愛着が深まった対象に、3年生になってもう一度再会し、社会的な見方・考え方を働かせて2年生の頃とは違う角度でその対象のさらなる良さに触れる。例えば、2年生の生活科においてはいつも笑顔で質問に答えてくれて、おいしいコロッケを食べさせてくれた〇〇さんが、3年生の自分にスーパーマーケットに負けないくらいのこだわりや工夫を教えてくれる。そのような過程の中で、「地域への愛着」は、「地域社会に対する誇りと愛情」へと育つのだろう。

4 生活科の実践における留意点

生活科とのつながりを意識した社会科実践で子どもたちが見せた姿は、自分との関わりのある世界(身近な世界、意味ある世界)を広げていく姿だった。その世界が広がれば広がる程、「なぜこの町は〇〇なのに、あの町は〇〇なのか。」といった疑問がより湧きやすくなり、それが集団の問題となり協同的に解決されることによ

って、「人が多く集まる所にはお店がしやすい。」などといった土地利用の在り方として普遍的な結論にまで達することができる。おそらく、子どもたちはこの先ボトムアップ的に学んでいく中で、「商店街が昔は繁盛していて、今は衰退してきているのはなぜか。」「では、なぜ商店街の中でもあの店は今もお客さんがたくさん来店しているのか。」などといった疑問を持ち、現実社会の抱えるより大きな課題や、その社会を生きている人々の頼もしさを実感するといった、より高次の段階にまで到達することだろう。

そのようにボトムアップ的に社会的な学びを重ねていくにあたって、生活科の実践における留意点は、自分にとって身近なフィールドとの関わりをより深めておくことである。例えば、自分の家の近所と他の地域とを比べたり、自分の家の周りに潜んでいる不思議をもっと掘り起こしていこうとする姿が見られたA児は、自分の家の周りでザリガニ掘みをしたり、近くの商店街におじいちゃんと買い物に行ったり、近くのお寺でよく遊んだりする子どもだった。そのようなA児だからこそ、「自分の家の周りと比べて、この辺りは〇〇だ。」という気付きを持つことができたのだろう。もしA児が自分の家の近所の様子に無頓着であったのなら、そのような比較を通した思考はできなかつただろう。自分と関わりのある世界における気付きを深めておくことにより、新たに出会う世界がより疑問を含んだ冒険心をくすぐる世界に見えるのだと考える。

Ⅳ おわりに

小学校3年生の社会科の実践から生活科の在り方について考察する上で、つながりを大切にしなければならないのは、生活科と社会科だけではないということを実感した。

子どもたちは、乳幼児期より徐々に自分にとって意味ある世界を拡大していく。自分にとって意味ある世界が広がれば広がる程、知識はどんどん増えていく。すると、事実と事実を比較したり分類したり関連付けたりすることができるようになる。つまり、自分にとって意味ある世界を広げることによって、社会的事象への認識をより深めていくことができるのだ。

社会的事象への認識を深めていく中で、「本当に昔は商店街が栄えていたのか。」という疑問にたどり着いたのなら、商店街が昔、城下町であったことを主体的に学ぶことができる。これは、中学校社会科の歴史的分野に発展する学習内容である。

このようなつながりを考えると、小学校段階の発達のみを考えるのではなく、幼稚園・保育所段階と小学校段階のつながり、小学校段階から中学校段階へのつながりといったように、発達過程の全てのつながりを意識した実践を構築していく必要がある。しかしその

学習過程は社会科の時数の中だけで構築することは容易なことではない。子どもたちが自分にとって意味のある世界を広げるためには、繰り返し外の世界と関わる体験が不可欠だからである。そこで、社会科や総合的な学習の時間、国語科、その他の教科等と関連させたカリキュラムを構築していく必要性も出てくるだろう。しかしながら、教育現場では未だに縦のつながりや横のつながりを意識することなく、従前の個別の知識・技能の習得に傾倒した授業が、少なからず見受けられる。新しい時代に必要となる資質・能力は、教え込みの指導のみで育成することは困難である。子どもたちにとって意味ある世界を広げていくカリキュラムの構築が教育現場における早急の課題となるだろう。

1 ベネッセ教育研究所「25年間で子どもの好きな教科はどう変わった？」(2017年6月7日)

[<http://www.benesse.jp/kyouiku/201706/201706-2.html>](最終検索日:2018年8月31日)

2 山根栄次・市川則文・三重「個を育てる授業」研究会 編著『個の育成をめざす21世紀の生活科・社会科・総合の授業づくり』黎明書房,2002,p.5

山根が社会科の学習を終えた大学生を対象に聞き取り調査をした結果をもとにこのように述べた。筆者も教育現場にいる中で、社会科嫌いの理由をこのように考える。

3 文部科学省「小学校学習指導要領(平成元年3月) 第2章各教科 第2節社会」

[www.mext.go.jp/a_menu/shotou/old-cs/1322320.html](最終検索日:2018年9月2日)

4 文部科学省『小学校学習指導要領(平成29年告示)』2017,p62

5 末政公徳『生活科と社会科 関連を深める授業づくり』明治図書,1993,p.21

6 小形浩子「小学校生活科から社会科への継ぎ目のない指導についての一考察—生活科から社会科への移行期におけるの地域学習—」『青森県総合学校教育センター 2007年 研究紀要』2008

7 加納誠司「社会的な見方・考え方につながる生活科の実践的研究—空間・愛着・自己実現を手がかりに—」『愛知教育大学研究報告(教育科学編)』第65輯,愛知教育大学,2016,pp.17-24

加納は、生活科で大切にしたい社会的な見方・考え方につながる視点として、「空間認識につながる視点」、「地域への愛着につながる視点」、「自己実現につながる視点」を挙げている。これらを、ボトムアップ的に社会科における「地理認識」、「地域社会への誇りと愛情」、「公民的資質」へとつなげていく授業分析がなされた。

付記:本稿は中野の指導・助言のもと、西野が執筆したものである。

(2018年9月25日受理)